

ジェイン・オースティンと結婚

—— その 'mercenary' な側面について ——

上 村 和 也

ま え お き

「行間を読む」ということばがある。「文字面に表われない筆者の真意をくみとる」, 「言外の意味を読みとる」……これと似たことをオースティンの作品の理解にあたっては、行なってみる必要がある。それは非常に興味あるものであると同時に案外「搦手」の効果的結果をもたらすものかも知れない。オースティンの作品は、全体として、ストーリー展開の上から曖昧さがあるわけでもない¹⁾。しかし、オースティンの作品の中には何が話られていないか、何が書かれていないか、あるいは、なぜに話られ書かれなかったのか、なぜ故意に（「故意に」と思わせるものがある）オースティンの創作の筆先からこぼれ落とされていったのか等と問うて見る必要があるのである。オースティンの作品についてはよく指摘されているように、死、戦争、性、神・宗教（牧師はしばしば出てくるが）、飢餓、誕生、子供、老人あるいはまた、オースティンと時代を同じくするフランス革命、産業革命、アメリカの独立、トラファルガー（Trafalgar）、ウォータールー（Waterloo）、ネルソン（Nelson）等への言及は、作品の中に出て来ないか、あるいは出て来ても何んら重要な役は演じていない。そしてこれらの事実ないし事件は、その不在によって顕著な（conspicuous by absence）というべきものになっている。そしてこのいわば作品の外部に関わることが示す顕著さは、作品の中に関わる事情によって益々その度合を増して行くように思われる。H. W. Garrod の言った「And indeed Miss Austen has but one plot²⁾」はその作品の中の事情を説明するものであった。不在によって顕著であるからといってまた、さして重要な役を演じていないからといって、オースティンの作品を読むことと並行して、オースティンの作品以外的事实・事件を読むことの重要性がより小さくなるというのでは決してない。この意味の「行間を読む」こともオースティンの作品理解には常に不可欠である。しかしそれと同時に、ここで主要な問題として取り上げようとしているのは、オースティンの小説に登場する主要な人物が結婚してゆく時の結婚のあり方、結婚に対する彼等の気持・考え方を見て何か異質なものを感ずること、しかもそれがオースティンの同時代であると同時にオースティンを越えたより普遍的なその時代の社会や経済事情、一国民の気

1) ジェイン・オースティンの文学作品は全体としてその主題・物語に不鮮明な難解さがあるものではない。しかし部分的にはあるいは逐語的には、「抽象化」という傾向を有しその意味の曖昧さが見られる。この点に関してはすでにふれたことがある。＜拙論・「『高慢と偏見』について」、本学紀要（人文・社会科学篇）第21号＞

2) *Pride and Prejudice, Text, Backgrounds, Criticism*, ed. Bradford A. Booth (New York, Harcourt, Brace and World, Inc., 1963), p. 162.

質、文化や伝統・習慣にかかわるものであるということである。それが一国民の文化や伝統の問題にまでなると暗々裡に無意識に前提されていることが往々にしてありうる。オースティンもこの点に関しては例外ではない。そこで「行間を読む」ことで、オースティンの作品における結婚の実体を通してその点を明らかにしてゆくのがこの小論のモチーフである。それが具体的にオースティンの結婚の如何なる側面であるかは行論と共に分かるはずである。

1

オースティンの作品に於いては、結婚がすべてである。がしかし恋愛はすべてではない。言うところの意味は恋愛が結婚と比べてその軽重が問われたり、又恋愛が人生においてつまらぬものだというのは勿論ない。そればかりか、男性と女性との人間関係・交際の魅力を追求し男性、女性が愛情を結合の基盤として両者の関係を築こうとする意志にオースティンの作品の主題がおかれていることから、オースティンの小説は恋愛を主題とした、いわゆる恋愛小説だということも出来る。実際オースティン自身の作家としての意図は疑いもなくそのような男女の人間関係を描くことにあった。がそれは恋愛なるものを結婚すると否とに係わらず、いわば男女の交際あるいは人間関係の1形体とみなしかつ愛情を基盤としているものだという一般的な観点からみた場合であるといえるが、ここで「結婚がすべてである」といったのは、もっと具体的に、オースティンの個々の作品を読んだ場合、その作品の持つ「話し」・「ストーリー」の上から見た場合のことである。即ち *Northanger Abbey* の女主人公 Catherine が Henry と結婚し *Sense and Sensibility* の Elinor は Edward Ferrars, Marianne は Brandon 大佐と結婚し *Pride and Prejudice* の Elizabeth は Darcy と結婚し, Emma は Knightly と, Anne は Wentworth と, Fanny は Edmund と結婚する。とにかく、オースティンの作品はすべて主人公、あるいは副主人公とおぼしきものの結婚で終わっている。この特徴はいわゆるオースティンの代表的作品のみならず、*Juvenilia*にしても、*The Watsons* その他の作品にしても認めうるものと言える。ほとんどの主人公(ほとんど女性とみてよいが)は結婚させられるべく設定されている。*Pride and Prejudice* の冒頭の一節である ‘It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.’³⁾ というオースティンのいわゆる ‘generalisations’ の一例は、作者の個人的表出、作者の生の顔の表出と思えるがそれは、すぐにそれに続く小説の中の男性の1人ビングリー (Bingley) に対する女性の反応へと作者の眼が転じてゆく。そして Bingley を娘の ‘property’ だとベネット婦人 (Mrs. Bennet) に言わせている所からも分かるように、女性が男性を結婚の対象として、しかもひとをものとしてとらえる傾向を示唆する気味を持ちながら追い求めるとか、あるいは結婚の相手として生涯を共にする人間としてふさわしい男性を探し出すというオースティンの変

3) *Pride and Prejudice, An Authoritative Text Backgrounds Reviews and Essays in Criticism*, ed. Donald J. Gray (New York, W.W. Norton and Company, Inc., 1966), p. 1.

らぬ主題を展開しているのである。だから上記の引用に続く ‘However little known the feelings or views of such a man may be on his first entering a neighbourhood, this truth is so well fixed in the minds of the surrounding families, that he is considered as the rightful property of some one or other of their daughters’. までもって基本的パターンを、端的に、適確に示している。それは結婚という事実の成立にあたっての前提条件とも言い得るものである。その意味では、よく引用される冒頭の一節 (It is a truth……must be in want of a wife) は、2 節 (However little known……or other of their daughters) 目まで引用されなければならない。2 節目の引用をふくめてはじめてオースティンの結婚の全体的要素が把握できるのである。即ち、なぜ ‘a single man in possession of a good fortune (イタリック・筆者、以下同じ) と書かねばならないのか。なぜ男性を ‘property’ というような表現をとるのか。又 ‘……must be in want of a wife) とか、‘he is considered……’ といったような所などには微妙な形で——必ずしもよくいわれているように ironic な形ではなく——男性が結婚の相手としてふさわしい女性を求めることと同時に女性が結婚の相手としてふさわしい男性しかも財産ある男性を求めるということが、女性の側に強調がおかれて伝えられているのである。さらに女性にとって、結婚というものはその当時の社会的慣例として将来の幸福を決定的に約束するものであった。特にオースティンの属するまた彼女の作品の舞台の中にとりあげられるいわゆる gentry の階級の間においてそのような観念が強く支配していたことは次の一節からも容易に想像出来るところである。

……The grand object of family policy, if such it may be called, was to secure the continuance and enhance the wealth and position of the family, and to this end the succession to the property and the marriage of the children, particularly the marriage of the heir or heiress, were carefully regulated. Marriages must be so arranged as to bring greater wealth, land or influence to the family, while the rights of the heir must be restricted so that what had been long and carefully built up would go forward to future generations.⁴⁾

The search for a suitable match for a son or daughter was often a prolonged affair. The wealth, standing, and political connexions of the other partner's family had all to be considered.⁵⁾

土地所有者階級 (the gentry もその一つだが) はいわゆる family estate が生活の基礎であり、また経済的、文化的、社会的保障を与えるものであった。したがって彼等はこの土地——

4) G.E. Mingay, *English Landed Society in the Eighteenth Century* (London, Routledge and Kegan Paul, 1963), p.28.

5) *Ibid.*, p.28.

名誉も富裕も、社会的地位、政治的影響力もこの上に依存している土地——を法律の力もかりて（例えば *strict settlement* の如き）代々に渡って残し伝えることが彼等の最大の義務であった。土地の販売は極力さけられたし、とくに本宅を手ばなすことは一族の名誉と存在意義を失うことと思われていた。その片鱗は、例えば *Persuasion* の中にケリンチ邸 (Kellynch Hall) をクロフト提督 (Admiral Croft) に借すにあたって、経済的困窮からやもう得ず人に借さねばならぬにしても、クロフト提督と准男爵のウォルター・エリオット卿 (Sir Walter Elliot) の身分の上下関係をあれほどに注意深く考慮したあげくようやく決められるということなどに典型的にうかがえる。したがって結婚それ自体もこの *estate* 存続の伝統の影響下に当然あらねばならなかった。いやそればかりか、結婚はそのための恰好の手段として利用されたふしがある。つまりその目的のためには結婚によるほか他に効果的手段がなかったからである。

G.E.Mingayは言う。

In view of the obstacles to acquiring an estate under eighteenth-century conditions — the small number of estates on the market, high cost of land, and the improbability of receiving an estate as gift or reward for public service — the main path to advancement necessarily lay through marriage.⁶⁾

かくして如何に結婚というものが社会的にも強い拘束力を持って女性の上にのしかかって来ていたかが推察されるが、その上この時代の *gentry* の娘達が結婚しないでいた場合どんな経済的困難にさらされるかという事実を持ち来たと（ゆうまでもなく一般に *gentry* の娘たちは職業に就くための教育は受けなかったので技術などは勿論身につけない。職業に就かない状態が男性の場合でもより高級なものだと思われていた。だからといって彼等が教養がなかったのではない。教養という観点からは彼等はむしろかなり洗練されていたのである。）両親・本人共に結婚には大きな期待と夢がこめられていた。具体的には例えば、

- (1) Landowners who through extravagance or mishap were in straitened circumstances were prepared to revive their fortunes by marriage with the daughters or widows of merchants, financiers and wealthy professional men, conferring in return for a substantial dowry the lustre of a title and the envied entrée to polite society.⁷⁾
- (2) From the outsider's point of view, marriage with the aristocracy was a means by which his daughters could enhance his family's standing and connexions, while within landed society, daughters were the medium through which rising families accumulated wealth, cemented political alliances, and extended their influence.⁸⁾

(1)の場合の例としては *Persuasion* のウィリアム・ウォルター・エリオットが最初に身分の

6) *Ibid.*, p.28.

7) *Ibid.*, p.28.

8) *Ibid.*, p.28.

低い金持ちの女と結婚して独立したことなどを思いおこせば足りるし、(2)は(1)と半ば同じことの異なった表現にすぎないが、*Pride and Prejudice* の中でキャスリン・ド・バーク婦人(Lady Catherine de Bourgh) がエリザベス (Elizabeth) のダーシー (Darcy) との結婚に反対するところ(第56章) (ここには ‘upstart pretension’ などというバーク婦人の意識を示す象徴的なことばまで飛び出してくる。) 後の例としてエリザベスとダーシーの結婚などをオースティンの典型的な考え方として思い浮かべれば十分であろう。

このように *estate* が政治的、社会的、政治的権力のバロメーターであり、土地所有者はその持続と発展を娘の結婚に待つ所が大きいことから必然的に結婚の経済的側面が重要視されて来た。特に娘の結婚は両親にとって最も心をくばり *dowry* も寛大に与えられたというようなことは上述したことから容易に推察できる。この結婚における金銭問題の重視のあからさまな指摘はウルフ (Leonard Woolf) の「The axis of the plot in every novel except *Emma* is money and marriage or rank and marriage. The social standard, ideal, and duty of a woman is assumed to marry as high or as rich as possible, and we know, on Mrs. Bennet's evidence that, according to the tariff, £10,000 a year was as good as a lord.⁹⁾」である。この指摘は G.E.Mingay の考察を中心に述べて来たことと一致する。女性は結婚するのが社会的通念であり義務でありしかも理想であった。その際出来るだけ富裕で身分が高く家柄のよい人と思うのも事実であった。しかしこの18世紀の *gentry* が抱いた結婚観は歴史的事実だったがそれがそのままオースティンの事実・真実ではなかった。それはオースティンにとっては基礎的事実というべきものであった。基礎的事実であるからこそ、オースティンの主人主たちは男であれ女であれ結婚それ自体に何んの疑惑も疑問もなく、まただから結婚をしないことが一つの生き方として強く提出されることはない。結婚さえすれば人生の難問題の大半は解決できるし、後は安泰だという気持ちが強いのである。特に女性においてはそうであり、*Pride and Prejudice* のベネット婦人 (Mrs. Bennet) が「人生の事業が彼女の娘を結婚させることである」という時、ベネット婦人は風刺的に描かれた気味があり愚かな人物ではあるが、ベネット婦人自身の結婚が人生の事業であったことを逆投影している一面が表わされているといえる。このような結婚観を背景に持ちながら、注意深く読めば、オースティンの作品の中で、結婚がしばしば ‘establishment’ (身を定めること) と言われ又 ‘settlement’ とか言われることの中には結婚によって身を定める、腰をすえてある安定した境遇におかれるということといわば自明の事実とするという背景があるのではないかということを示唆している。*gentry* の娘たちにとって結婚とはそのようなものでそれによってのみ将来の幸福・安寧を保障されたという時、オースティンが生涯独身で通したという事実が自然と浮かび上がってくる。独身であったからこそ生涯「一つの plot しか持たない」といわれるほど結婚をテーマとした小説を

9) *Critics on Jane Austen*, ed. Judith O'Neill (London, George Allen and Unwin Ltd., 1970), p.51.

書いたと思われる（もし結婚していたら自分の娘を結婚させる親の気持を書き続けたかも知れぬ？）。オースティン自身も独身であったし、上に述べたような社会的圧迫に類するものが独身としてのオースティンの精神の上に乗りかかっていたと想像されるので、その点からも結婚に対しては大きな関心を持っていたと思われる。オースティンの書簡の一節に次のようなものがある。

There are such beings in the World perhaps, one in a Thousand, as the Creature You and I should think perfection, Where Grace & Spirit are united to Worth, where the Manners are equal to the Heart & understanding, but such a person may not come in your way, or if he does, he may not be the eldest son of a Man of Fortune, the Brother of your particular friend, & belonging to your own County. — Think of all this Fanny. Mr. J. P — has advantages which do not often meet in one person. His only fault indeed seems Modesty.¹⁰⁾

オースティンは理想の結婚対象は千人に一人だという。‘Grace & Spirit are united to Worth’ といい ‘Manners are equal to the Heart & Understanding’ というのは、オースティンが love-match を理想としていたことに関係しその要素を抽象的に述べたものであるが¹¹⁾、いまここで問題とするのは ‘Man of fortune’ ということばが出て来ているということである。「財産のある人の長男でないかも知れない」というのではあるが、ここは明らかにそうであったほうがよりよいことだがという意味でいわれている。

それではこのようにオースティンにおいて又作品の中においても¹²⁾、結婚に際して生活基盤としてまた社会的・政治的基盤として、双方の経済状態が慎重に考慮されたことは単に snobbery からであったのだろうか。pride や ostentation からのみでできたことであったのだろうか。たしかに土地所有者の中にはそのようなものもいたが又オースティンの作品の中でも Lady Catherine de Bourgh や Sir Walter Elliot のような確かに滑稽なまでに snob であり高慢な人物も出てくるが、すべてが snob であったわけではなかった。pride もいい意味の pride が存在しえたのである。そしてそれがオースティンの本来の時の姿——創作の活動の中にあり、作品の持つ世界から自由であった時の姿——であったと思われる。先に引用した書簡からもうかがえるように love-match を結婚の理想的形体と考えていたし、又作品の中でも如何に love-match

10) Norman sherry, *Jane Austen* (Evans Brothers Limited, London, 1966), p.92.

11) オースティンにあっては結婚を決定する主要な要素として私は三つを考える。①財産・金②血統・家柄③人物・人柄、接して楽しい気持のよい人物、とくに③はりっぱな態度、会話の面白み、美貌、頭脳、気質のやさしさなどの要素から成るものと解される。③③の問題もオースティンの理解には重要であるが本論は①の考察を目的としているので、この小論を越える問題であり別の機会に取り上げるつもりである。勿論以上は愛 (love) の条件であり愛そのものではない。愛はそれを越える価値を持つ。

12) 例えば、オースティンの作品の中にはしばしば某々の男性の収入が年何千ポンドであるとかいうことが出て来るが、そのようなことに慣れないわれわれ読者には読んでいてある不協和な響きを与えられこれ程まで表現しなくてもと思い奇異な感じをうける。*Pride and Prejudice* には実に35回に渡って現われる。

を、それをさまたげるいろいろの障碍の中で実現させるかがいろいろに試みられ、それにより 1 編の長編小説を書き上げる困難さが、かえって小説のテーマとして恋愛、結婚がとり上げられることを可能にしたともいえる。そこに作家のもつエネルギーの燃焼と灰が存在しえたのである。それと同時に先きのオースティンの‘economic determination’はこの18世紀という時代に特有の gentry の生活に於いて、結婚が、政治的・経済的要素に左右される面がどうしても多かったという特殊性に目を向けなければならないのは勿論のことである。そしてまたそれを snobbery や pride 等にややもすれば安易に帰してしまう傾向が強いが、たとえそこには否定出来ない実体もあることは認めるにしても、次のようなことも考えて見る必要があると思われる。

2

上に述べたことをもっと一般的に言えば、オースティンの意識の中でもまた作品の人物にあっても結婚の条件としての経済的要因が強調された。さらに公式的に言えば、オースティンに於いて経済的要因は結婚と共にそして結婚の中に存在した。‘economic determination’は結婚と離れて後から（前にくることはあったが）くることはなかった。そしてこの点にまで及ぶともはやオースティンとその時代のことではなくそれを越えて存在するものになってくる。人の意識の深い所に至っているからオースティンもそれに気付くことはない。ということはそれが素直にオースティンの血肉として受け入れられ、オースティンはその中で生きていたということである。

Pause there, Morocco,
And weigh thy value with an even hand,
If thou be'st rated by thy estimation,
Thou dost deserve enough, and yet enough
May not extend so far as to the lady,
And yet to be afraid of my deserving,
Were but such a weak disabling of myself.
As much as I deserve? why that's the lady!
I do in birth deserve her, and in fortunes,
In graces, and in qualities of breeding;
But more than these, in love I do deserve.

(Shakespeare, *The Merchant of Venice*, II, vii, 24—34.)

ここにはオースティンの結婚の考察にあたり問題点として注目したことが、おどろくほどそっくりそのままの形ででている。Morocco 王が結婚しようと思っている Portia に対して

‘birth’, ‘fortune’, ‘graces’, ‘qualities of breeding’ という。これらは先きにオースティンの結婚を決定する要素としてあげたこととほとんど同一の表現と見なしうる。又love-matchをどちらも出して来ているし、Morocco 王が自分の値打ちが相手のものと比べどの程度のものかと計かる所で、卑屈になってもいけないだからといって高慢になってはいけないと思うあたり、オースティンにおける gentry がいい意味の pride (卑屈でないこと) と悪い意味のいわゆる pride (高慢) との間に身を処していく時のむずかしさなどと同じような 気持の動きを示している。さらに注意しておく必要があるのは、両者の love が明確に結婚をその目標・前提としていることである。love が生まれれば必ず結婚と結びつくということでありここに至れば、結婚の中に経済的要因が存在するのみならず、恋愛の中にまでそれが存在するに至っているといつてよい。つまり、個人の問題と同時に社会の問題、倫理が恋愛の中にも存在していることである。恋愛と他の価値 (birth, fortune, graces, qualities of breeding) を同じ広場でその葛藤と共存を可能ならしめていることである。これは次の透谷の「厭世詩家と女性」と比べてみれば一層理解が容易になるだろう。

恋愛は人世の秘やくなり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ、……蓋し人は生れながらにして理性を有し、希望を蓄へ、現在に甘んぜざる性質あるなり。社会の貧賤に苦しめられず真直に伸びたる小兒は、本来の想世界に生長し、実世界を知らざる者なり。然れども生活の一代に実世界と密接し、抱合せられざる者はなけむ、必ずや其想世界即ち無邪気の世界と実世界即ち浮世又は娑婆と称する者と相争ひ、相睨む時期に達するを免れず。実世界は強大なる勢力なり、想世界は社界の不調子を知らざる中にこそ成立すべけれ、既に浮世の刺衝に当りたる上は、好しや苦戦博闘するとても、遂には弓折れ箭尽くるの非運を招くに至るこそ理の数なれ。此時、想世界の敗将気沮み心疲れて、何物をか得て満足を求めんとす、勞力義務等は実世界の遊軍にして常に想世界を覗ふ者、其他百般の事物彼に迫って劍鎗相接爾す、彼を援くる者、彼を満足せしむる者、果して何物とかなす、曰く恋愛なり、美人を天の一方に思求し、輒転反側する者、実に此際に起るなり。生理上にて男性なるが故に女性を慕ひ、女性なるが故に男性を慕ふのみとするは、人間の価値を禽獣の位地に遷す者なり。春心の勃発すると同時に恋愛を生ずると言ふは、古来、似非小説家の人生を卑しみて己れの卑陋なる理想の中に縮少したる毒弊なり、恋愛豈單純なる思慕ならんや、想世界と実世界との争戦より想世界の敗将をして立籠らしむる牙城となるは、即ち恋愛なり。

ここで透谷は想世界と実世界とを対立せしめ、想世界にのみ住する詩家が厭世家になるべく運命づけられていることを述べ、そしてその‘敗将’にとっての唯一の‘牙城’となるのが恋愛であるという。実世界は厭世家にとって価値なきものであるが実世界の仮偽の中で『誠実忠信「死」も奪ふ可らずと見ゆる者』が恋愛であるという。かくして恋愛は etherealize され現実世界のそとに位置を与えられ、真なるもの美なるもの善なるものとして隔絶してしまう。したがっ

て結婚とも隔絶する。結婚と隔絶した恋愛は、その結果として益々現実世界を軽視・軽蔑しそれ自身を美化し、情欲を醜いものとして、実世界の影を落さぬ所に冠絶する。ここに『菊と刀』のベネディクト (Ruth Benedict) の言をまつまでもなく、わが国の倫理は、結婚と恋愛を不連続なものと考えたために、恋愛の中の倫理と結婚の中の倫理が組み合わない。恋をしていることが必ずしも結婚をする前提にならなくてよいということは結婚は、何かのための結婚になる。子供を生むため子孫のためであったりすることになり、一方恋愛は恋愛だけで浮動しそれ自身の存在を主張するために益々純粹化する。だが西欧人にとってはそれは理解出来ない。彼等にとっては恋することが結婚の基本なのである、ここからかえって結婚の中にあるといった‘economic determination’も恋愛の中に位置するようになる。しかも恋愛の恋愛たることは失なわない。オースティンもやはりこの西欧の伝統の中にあった。

3

Persuasion の中に次のような一節がある。

It was now his object to marry. He was rich, and being turned on shore, fully intended to settle as soon as he could be properly tempted: actually looking round, ready to fall in love with all the speed which a clear head and quick taste could follow. He had a heart for either of the Miss Musgroves, if they could catch it; a heart, in short, for any pleasing young woman who came in his way, excepting Anne Elliot.¹³⁾

ここにはおどろくほど実に見事に、オースティンにおける結婚のあり方が露呈されている。Wentworth は結婚することが目的であり(今から結婚するのだといってもおかしくないが、今から恋愛するのだといえばおかしいことになる。はじめから惚れることを目的にして惚れるのではない。オースティンにおいては結婚がすべてであるということ。), 金持でなければならず(結婚にはお金は関係ないとはいわない。オースティンの‘mercenary’な側面), 結婚することを settle (腰を落ち着ける) と表現し、結婚は love-match でなければならないが‘properly’ (適当に) であり, ‘clear head’ (明晰な頭脳) と ‘quick taste’ (鋭敏な趣味) にかなうものでなければならず(「恋愛ありて後人生あり」, とはいはない), 結婚の対象は ‘pleasing’ な人でなければならず, しかも恋愛と結婚は連続したものとしてとらえられ, 結婚を目的として恋愛を目的としえぬものが恋愛結婚を成就しようとする困難が1篇の長編小説をなす, 等々…。

この小論のモチーフであった, オースティンの結婚における‘economic determination’について言えば, gentry の family policy (家族政策) から家族の富と地位の持続及び発展に最重点がおかれそのため相続人の結婚には細心の注意が払われる。strict settlement はその法的

13) *Persuasion*, The World's Classics, (Oxford, 1963), p.68.

処置の表われである。その上 gentry は消費者であり the borrowing class であった¹⁴⁾。それだけに先きの family policy とこの地位的特性の間で娘の結婚に期待がかけられた。その女性達は、もし dowry の金がないなら Jane Fairfax が奴隷状態という家庭教師になるほかなかった時代のことである。‘It was wrong to marry for money, but it was silly to marry without it’¹⁵⁾。はその意味で極くあたりまえの生きた常識というべきものであった。だからオースティンが‘mercenary’であると断定を下す前に、彼女が金銭に関して‘snob’だという前に、時代的・社会的事実を考慮に入れると同時に、結婚と他の現世的価値とを連続したものとしてとらえる伝統、恋愛と結婚を結びつけてとらえる西欧的観念、結婚と恋愛を通じて連続した倫理観が存在するということが無意識のうちに、文字通り抜きさしならぬ形で存在していたことに注意しなければならない。われわれはオースティンを‘mercenary’と結論を下す前に、この恋愛と結婚の関係を改ためて認識しておかねばならない。そうすれば‘There is no delineation of true love in Jane Austen’¹⁶⁾というような批評に対してはちゅうちょせざるを得なくなるであらう。

原稿受理 1972年10月2日

14) *European Nobility in the Eighteenth Century*, ed. Albert Goodwin (New York, Harper & Row, 1967), p. 9.

15) *Critics on Jane Austen*, ed. Judith O'Neill (London, George Allen and Unwin Ltd., 1970), p. 34.

16) Andrew H. Wright, *Jane Austen's Novels*, (London, Chatto and Windus Ltd., 1964), p. 11.